

言語プロセッサ2014 No. 13

東京工科大学
コンピュータサイエンス学部
亀田弘之

平成27年1月5日(月)3限

今日の内容

1. ANTLRWorks の紹介
2. ANTLR v4 の紹介
3. プログラミング言語設計へ向けて

学問的キーワード

- 文法
- BNF (Backus-Naur Form)
- 字句解析器 (lexer)
- 構文解析器 (parser)
- 構文図

Antlrworkの紹介

- もう一つのツール
(JavaCCもあるよ！)

ANTLRWorksの紹介

1. ANTLRWorks とは何？
2. ANTLRWorks インストール
3. 起動と終了
4. 使い方
 - ① 文法作成
 - ② 文字解析と構文解析
 - ③ 実行

文法作成例

1. 文法名の設定.

- 文法の名前とファイル名は揃える.
- 今の場合, 文法の名前を **Expr** とするので, 文法を格納するファイル名は, **Expr.g** とする.

2. ANTLRWorksをエディタとして使い, 文法的设计をする.

- 文法記述を順次説明する.

Expr. gの仕様

- “120+45*2” や “x = 5” などのプログラム文1つ上
が, 改行で区切られている. これを順番に読み込
んで処理する.

- 例えば,

1+4

a = 8

a+a*2

というプログラムを読み込ませると,

5

24

と表示される.

文法の作成(1):名前付与

grammar Expr;

文法の名前の定義

文法の作成(2): prog要素定義

grammar Expr;

prog: stat+ ;

prog



文法の作成(3): stat要素定義

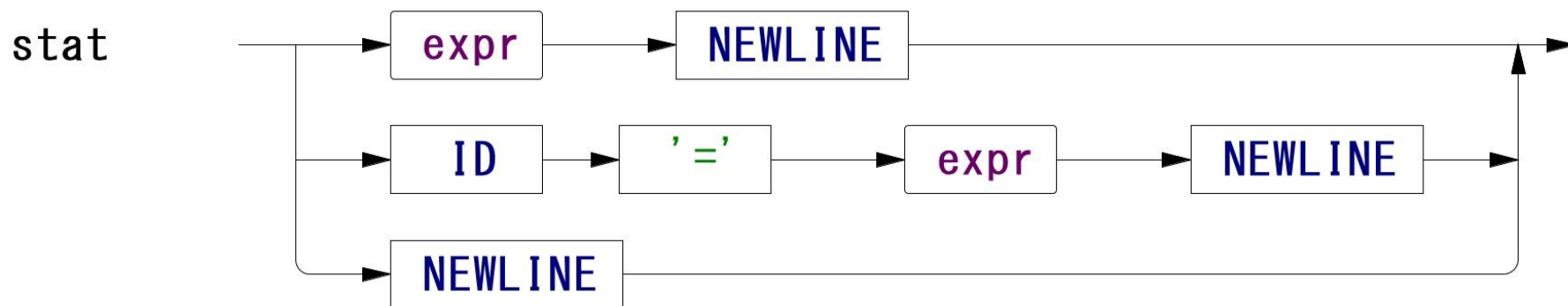
grammar Expr.g ;

prog: stat+ ;

stat: expr NEWLINE

| **ID '=' expr NEWLINE**

| **NEWLINE ;**

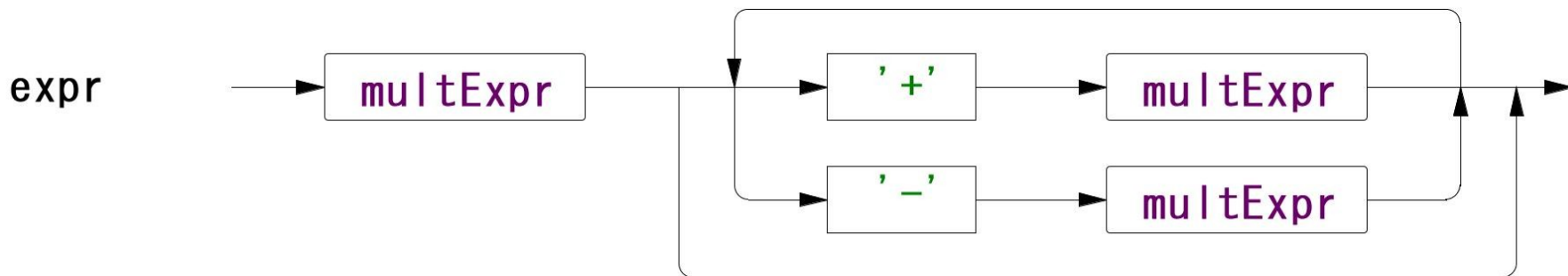


文法の作成(4): expr 要素定義

expr:

multExpr

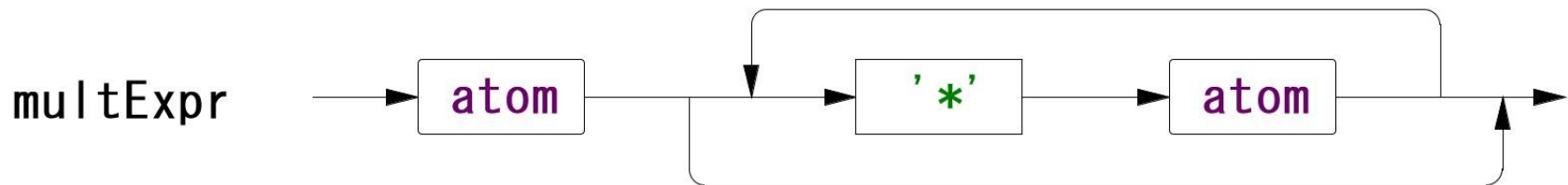
('+' multExpr | '-' multExpr)^{*} ;



文法の作成(5): multExpr 要素定義

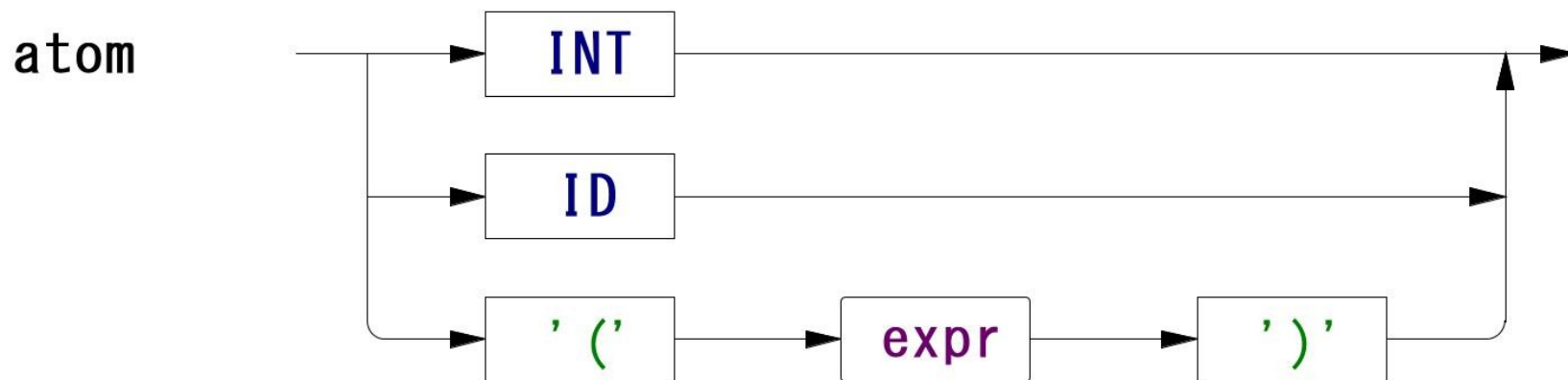
multExpr:

atom ('*' atom)*



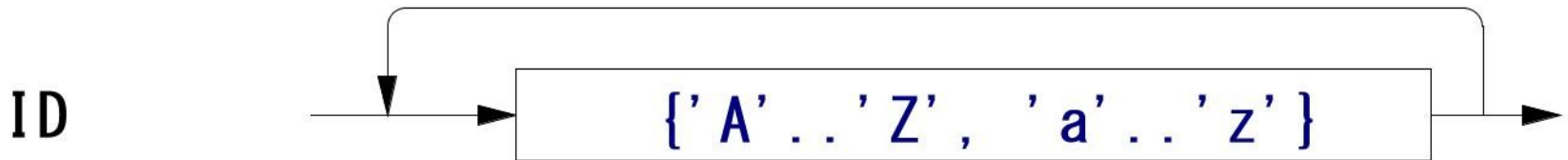
文法の作成(6): atom要素定義

atom: INT | ID | '(' expr ')';



文法の作成(7): atom要素定義

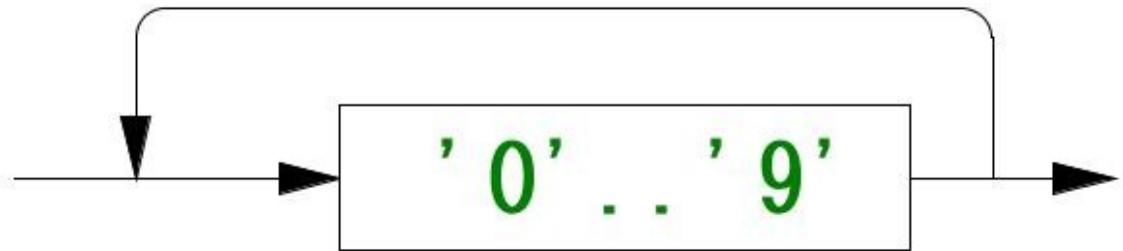
ID : ('a'..'z' | 'A'..'Z')+ ;



文法の作成(8): INT要素定義

INT : '0'..'9'+ ;

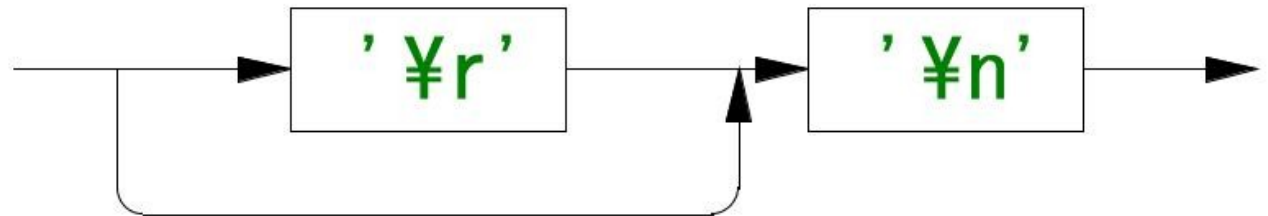
INT



文法の作成(9):NEWLINE要素定義

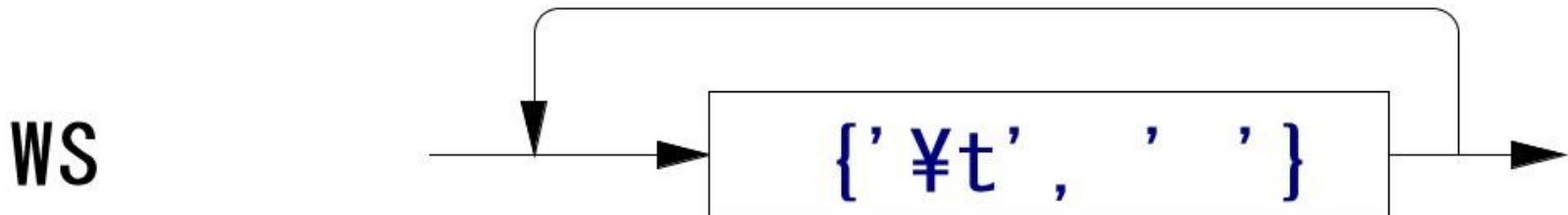
NEWLINE:'¥r'? '¥n' ;

NEWLINE

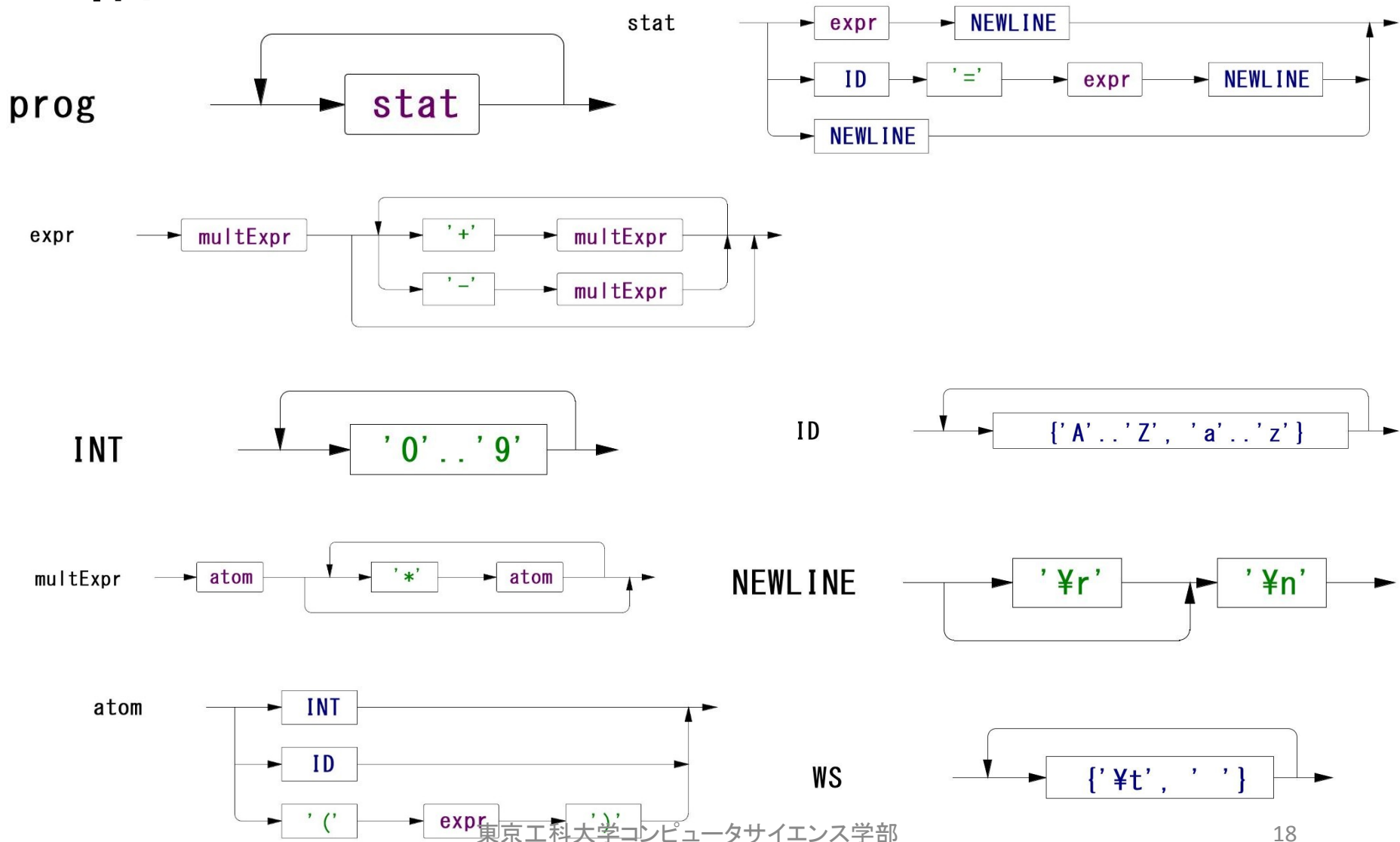


文法の作成(10): WS要素定義

WS : (' '|'¥t')+ {skip();};



構文図



設計した文法の概要 (Expr. g)

grammar Expr;

prog: stat+ ;

stat: expr NEWLINE | ID '=' expr NEWLINE | NEWLINE ;

expr: multExpr ('+' multExpr | '-' multExpr)* ;

multExpr: atom ('*' atom)* ;

atom: INT | ID | '(' expr ')';

ID : ('a'..'z'|'A'..'Z')+ ;

INT : '0'..'9'+ ;

NEWLINE:'\r'? '\n' ;

WS : (' '|'\t')+ {skip();} ;

説明できますか？

(注)

- ここまで一所懸命やっている作業は,
「**文法的设计・作成**」
ですが, これは
「**言語的设计・作成**」
でもあります.

形式言語とオートマトンの授業より
言語 L は文法 G により定義され, $L=L(G)$.

このプログラミング言語のプログラム例は以下の通り.

```
A = 100
```

```
B = 300
```

```
C = A + B * 2
```

```
C
```

```
1+2+3+4
```

文法をもう少し詳しく見ると…

- 構文の記述だけではなく、動作も記述されている。

文法の動作部分の説明

grammar Expr;

```
@header {  
import java.util.HashMap;  
}
```

変数名とその値を保存する表

```
@members {  
/** Map variable name to Integer object holding value */  
HashMap memory = new HashMap();  
}
```

grammar Expr;

prog: stat+ ;

stat: expr NEWLINE { System.out.println(\$expr.value); }

| ID '=' expr NEWLINE

{ memory.put(\$ID.text, new Integer(\$expr.value)); }

| NEWLINE ;

expr returns [int value]

: e=multExpr {\$value = \$e.value;}

('+' e=multExpr {\$value += \$e.value;}

| '-' e=multExpr {\$value -= \$e.value;}

)* ;

grammar Expr;

(省略)

multExpr returns [int value]

: e=atom {\$value = \$e.value;} ('*' e=atom {\$value *= \$e.value;})* ;

atom returns [int value]

: INT {\$value = Integer.parseInt(\$INT.text);}

| ID {

Integer v = (Integer)memory.get(\$ID.text);

if (v!=null) \$value = v.intValue();

else System.err.println("undefined variable "+\$ID.text); }

| '(' expr ')' {\$value = \$expr.value;} ;

grammar Expr;

(省略)

ID : ('a'..'z'|'A'..'Z')+ ;

INT : '0'..'9'+ ;

NEWLINE:'\r'? '\n' ;

WS : (' '|'\t')+ {skip();} ;

動作させてみよう！

1. 構文着を作る(字句解析＋構文解析)
2. プログラムを実行する(実際に計算させる)

これ以降は，自分でプログラミング言語を設計することになります

```
program tasu {  
    a = 4  
    b = a + 6  
    a  
    b  
}
```

この言語の文法はどうなりますでしょうか？

最後に、ANTLR4について

まずは、開発・実行環境の整備

1. ANTLR v4 をダウンロードする。
2. CLASSPATH を設定する。
3. (任意) alias の設定をする。

まずは、開発・実行環境の整備

1. ANTLR v4 をダウンロードする。

- 対象: antlr-4.1-complete.jar
- 設置先:
 - Linuxの場合: /usr/local/bin
 - Windowsの場合: c:\¥Javalib

2. CLASSPATH を設定する。

- Linuxの場合:

```
export CLASSPATH="./usr/local/bin/antlr-4.1-complete.jar:$CLASSPATH"
```
- Windowsの場合:

```
SET CLASSPATH=.;c:\¥Javalib¥antlr-4.1-complete.jar;%CLASSPATH%
```

3. (任意) alias の設定をする。

- alias antlr4='java -jar /usr/local/bin/antlr-4.1-complete.jar'
- alias grun='java org.antlr.v4.runtime.misc.TestRig'

練習1 次の文法を入力する

```
Grammar Hello;
```

```
R : 'hello' ID ;
```

```
ID : [a-z]+ ;
```

```
WS : [ ¥t¥r¥n]+ -> skip ;
```

ANTLRWorkに入力し、入力ミスのチェックをする。

注意点

- 文法を格納するファイル名は、“**Hello.g**”です。
- ANTLRWorksを用いて、構文図を描画してみる。

練習1 コンパイルする

```
$ antlr4 Hello.g
```

```
$ javac Hello*.java
```

注意点

- リストコマンド (ls や dir) など、どんな名前のJava言語コードがいくつ生成されたか確認してみよう。
- 自動生成されたプログラムの中を、エディタ等でのぞいてみるのも勉強になります。

練習1 実行する(CUI形式)

```
$ grun Hello r -tree < input.txt
```

- コマンド grun は、alias で別名を与えたもの。その実体は以下のことを行ったのと同じ。
\$ java -jar /usr/local/bin/antlr-4.1-complete.jar
- Hello は、文法名がHello だから。
- 引数 r は、文法の開始記号が r だったから。
- オプション -tree は、木構造を出力したいから。
- 入力ファイル input.txt は次ページ参照。

(注) input.txt の中身(1つの例)

12+ 81

A = 6

B = A * 10

A * (A + B)

キーボード(標準入力)からの
入力の代わり。

実行結果 (-treeで実行した場合)

```
$ grun Expr1 prog -tree < input.txt
(prog (stat a = (expr (multExpr (atom 4))) \r\n)
(stat b = (expr (multExpr (atom 7))) \r\n)
(stat (expr (multExpr (atom a) * (atom b)) + (
multExpr (atom a))) \r\n))
```

実行結果 (-gui で実行した場合)

